

大学生に対する心理教育的アプローチ (2)

——教職課程科目を効果的に学習するための 心理教育プログラムの開発——

太 田 列 子

1 はじめに

公立小・中・高等学校における生徒指導上の諸問題の現状

平成 16 年度文部科学省発表の「児童生徒の問題行動等の状況について」(2005)によれば、問題行動の発生件数は中学校におけるスクールカウンセラーの配置が進み、全校挙げての生徒指導体制の充実や教員各自の努力もあって、前年度に比べて若干の減少は見られるものの、以下のように依然として深刻な状況である。

1. 暴力行為の発生件数 (公立の小・中・高等学校)
学校内：30,022 件【前年度 31,278 件】 ※4.0 パーセント減
学校外：4,000 件【前年度 4,114 件】 ※2.8 パーセント減
2. いじめの発生件数 (公立の小・中・高等学校及び特殊教育諸学校)
21,671 件【前年度 23,351 件】 ※7.2 パーセント減
3. 不登校児童生徒数 (国公私立の小・中学校)
123,317 人【前年度 126,226 人】 ※2.3 パーセント減
4. 児童生徒の自殺者数 (公立の小・中・高等学校)
125 人【前年度 137 人】

平成 16 年度は全般的に減少傾向であるが、近年の統計によれば、生徒指導上の諸問題について、不登校児童生徒数は減少傾向にあるものの、暴力行為やいじめの発生件数はむしろ微増傾向にあり、こうした状況を踏まえて、各学校では生徒指導体制の強化、教育相談体制の充実、学校と家庭・地域等関係機関の連携推進などに取り組むことが求められている。

大学における教員養成課程の目的

このような事態に対応するため、文部科学省は「学校教育の成果は、教育に直接携わる教員の力によるところがきわめて大きい」として、特に自ら学び自ら考える力の育成や、いじめ、不登

校への対応など学校教育を巡る様々な課題の中での、魅力ある優れた教員の確保を重要課題としてあげている。さらに現場の課題に適切に対応できる、力量のある教員の養成を大学における教員養成課程に求めている。

その内容は「採用当初から学級や教科を担当し、教科指導、生徒指導等を実践するために必要な資質能力を備えた人材の養成」であり、教職免許課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得するというものである。さらに、教員に今後特に求められる資質能力として「課題解決能力」や「人間関係に関わる資質能力」「幼児・児童・生徒や教育の在り方についての適切な理解」などがあげられている（文部科学省：1997）。

2 本研究の目的と方法

本研究の目的

筆者は平成14年度より、中学校及び高等学校教員養成課程の教職科目の一つである「教育相談の研究」を受け持っている。教育相談とは、学校教育システムの中で生徒指導の中核として位置づけられており、上記の公立中・高等学校の現状や文部科学省の求める未来の教師像を考え合わせると、きわめて重要な役割を担っていると考えられる。

大学における教職課程の目的は、いうまでもなく学生が教師になったときに最低限必要とされる理論と技術を修得させ、実践の場で最大限に能力を発揮できるように援助することであろう。それには学生が学校コミュニティの現状と学校で起こる様々な問題への知識及び、アプローチの方法を身につけておくことが必要である。

そこで授業を行うにあたって、教員養成のための教職課程における必修科目として、授業の目的を遂行するためのカリキュラムを作成する必要性を感じた。文部科学省や学校の求める、自ら学び自ら考える力の育成及び、いじめ、不登校への対応など、学校教育を巡る様々な問題の中で、現場の課題に適切に対応できる力量のある教員をどのようにすれば養成できるのだろうか。

また一方で筆者は、これまでスクールカウンセラーとして、公立中学校や高等学校において「いじめ」や「不登校」「暴力行為」「非行」「虐待」「発達障害」など、様々な問題を抱えた生徒と関わってきた。このような教育現場で教員と共に試行錯誤を繰り返すことで得た臨床実践の経験から、大学生が将来教員となったときに最低限身につけておいてほしい、生徒に向かう基本的姿勢、知識や技能もある。

教師が生徒を理解しようとする時、最も必要になるのは、ロジャーズ（1961）がカウンセリング関係で提示した「無条件の肯定的配慮」と「純粋性」「共感的理解」の3条件態度であろう。これを文部科学省は「カウンセリングマインド」と名付け、生徒の可能性を引き出す教師の基本

姿勢として、教員養成の中核に位置づけている。こうした態度を身につけるためには、まず、自己の体験を内面化して深めていく作業が必要になる。

以上のことから、本研究では「教育相談の研究」を効果的に学習するための、心理教育プログラムの開発を目的として、平成14年度から17年度までの4年間に行った「教育相談の研究」のカリキュラムを検討する。

方法

平成14年度から平成17年度までのシラバスとカリキュラムをもとに、実際に行った授業を振り返り、前年度の反省点をふまえて、次年度のカリキュラム作成していく過程を記述する。授業終了時に提出されたレポートから、授業の効果を測定し、授業過程で起ったエピソードをもとに、4年間に行ったカリキュラムの変更に対して検討と考察を加える。効果測定の方法としては、心理臨床家3名によるレポート評価を用い、授業において学生が自らの体験に引きつけて学習内容をとらえ、感情体験を内面化して深めることで、人格的成長に役立っているかどうかを0.1. 2. 3の4段階で評価する。また、評定者3名による評定の一致度を測定するために、ケンドールの一致係数を算出する。

3 カリキュラムの実際

カリキュラムの概要

筆者が平成14年度に作成したシラバス(表1)によれば、教育相談を学校カウンセリングの視点からとらえ、「生徒の発達援助の具体的方法としての教育相談やカウンセリングの理論と技法を学び、事例をもとに生徒理解や援助関係を形成する過程を検討する。さらに、ロールプレイング(以下、RPとする)によるカウンセリング実習を通して教育相談の実践的な技法を学ぶ」とし、その主な対象として「いじめ」「不登校」「非行」をあげている。また、平成14年度のレポート課題は「不登校・いじめ・非行について自分の経験に基づいてそのときの思いや考えを述べ、合わせて現在の視点から考察を加える」というものであった。

授業の中ではこれらの諸問題の理論と実態について、テーマごとに学生の希望によって、3つのグループに分かれて調査した。次に調べた内容を発表し、これをもとに筆者が補足説明と事例研究を行った。さらに筆者が学校現場で経験した事例をもとに、学生が企画して教師や生徒、保護者や友人などの役割を決め、RPを行った。

表1 平成14年度 シラバス

科目名		単位数	担当者		備考
教育相談の研究		必	太田 列子		
		選	2	履修学年	3年
週時間	1時間	選必	期間	後期	

授業のテーマ 教師による生徒理解のための臨床心理学的知識や技法について学習する。
 授業内容 現在学校では不登校生徒は増加の一途をたどり、いじめも陰湿化しているといわれる。このような現状の中で、教師は生徒にどのようにかかわっていけばよいのか。主に学校カウンセリングの立場から考える。本講義においては児童・生徒の発達援助の具体的方法としての教育相談やカウンセリングの理論と実際を詳述し、事例をもとに生徒理解や援助関係を形成する過程を検討する。さらに、ロールプレイングによるカウンセリング実習を通して、教育相談の実践的な技法を学ぶ。

教科書 近藤邦夫編『子どもの成長・教師の成長』（東京大学出版会）

参考書 秋山俊夫監修『図説・生徒指導と教育臨床』（北大路書房）

評価 レポート

授業計画

1. はじめに
2. 学校システムの中の教育相談
3. 教師と生徒の人間関係
4. 生徒理解と教育相談の方法
5. 生徒の不応行動と問題行動
6. 「いじめ」の理論と実態
7. 事例の研究（1）
8. ロールプレイング（1）
9. 「不登校」の理論と実態
10. 事例の研究（2）
11. ロールプレイング（2）
12. 「非行」の理論と実態
13. 事例の研究（3）
14. ロールプレイング（3）
15. まとめ

授業中に起こった出来事と提出されたレポートからの考察

授業を進めている間に、本講座を受講している学生が他の教職課程の授業中に自らの不登校経験について話し、これを本人の教員志望の動機として位置づけるという事態が生じた。教官から連絡を受けた筆者は、これを学生の心理的成長の一端としてとらえ、不登校について学習することによって、自らの経験を振り返る中で当時の状況や気持ちを再体験し、自己の内面に再体制化していく過程であると評価した。当該学生はその後教職の諸課程を優秀な成績で修了し、現在は念願の教師として働いている。

提出されたレポートからは、学生たちが「いじめ」「不登校」「非行」の諸問題を加害や被害の

当事者や家族、友人、クラスメイトとして経験していたり、見たり聞いたりしていること。また本人が実際に体験していなくても“経験していない”という体験から考察していることが伺えた。また、全受講者23名のうち「いじめ」をテーマとしたものが14名、「不登校」5名、「非行」2名、その他2名で、いじめ経験者が圧倒的に多かった。これはいじめの認定が主観によるため、いじめについて学習することで学生の意識が高まったためではないかと考えられる。

平成15年度のカリキュラムの作成とレポート課題の変更及び提出されたレポートからの考察

平成14年度の授業の結果を受けて、平成15年度のシラバスでは、教科書を指定せずに学生の調査発表の補足を兼ねて、筆者がプリントを作成して配布し、解説することにした。また、事例研究とRPを同時に行うことで、従来の「いじめ」「不登校」「非行」に「虐待」のテーマを加え、学生の希望にそった多様な選択を可能にした。さらに学生の心理的安全性を考慮し、レポート課題を「自らが選んだテーマに基づいて、グループでの調査内容のまとめと企画したRPの概要、実施状況、及び実施後の感想を述べ、考察する」とした。

提出されたレポートには、筆者が指示していないにも関わらず、自らの過去の体験について記述し、内省している学生が見られた。これらの学生は、自主的に自分自身の過去の体験を振り返って授業で得た知見に照らし合わせ、再体験し検討を加えることで、改めてこれらの体験を自己の内面に位置づけ整理していた。

平成16年度のカリキュラムの作成及び授業中に起こった出来事と提出されたレポートからの考察

平成15年度のレポート結果や授業中の感想から、公立中・高等学校における教員養成のための「教育相談の研究」の授業カリキュラムやRPが、同時に大学生に成長促進的効果を及ぼすことが窺われた。このことから、テーマにさらに「発達障害」を加え、学生の選択肢を増やすと同時により効果的なRPの実施方法を工夫することとした。

この回では「いじめ」をテーマにしたRPの最中に、特定の学生に非難が集中する場面が起きた。学生によるRPの企画内容は、事例に沿っていじめ役といじめられ役の生徒を設定し、他の学生全員が担任や保護者、クラスメイトの役で参加するというものであった。いじめの理解の中で、教室内に傍観者を作らないのが一番大切だと教授していたこともあり、RP中のクラスメイト役の学生たちの傍観者的態度が気になった筆者が、一通りRPが行われ、学生全員が一言ずつ演技者の前で感想を述べる場面で「傍観者にならないために、もしもこの中の誰か一人に何か声をかけるとしたら、いったい誰にどのような言葉をかけるのか」という場面設定をし、生徒役の学生たちに実演させたところ、多くの学生がいじめ役の学生に対して非難の言葉を投げかけ、このためにいじめ役の学生が心理的に動揺する事態となった。

これは、いじめ役の学生がRPでの演技上行った役割に対して罪悪感を感じていたことと、役

割と日常生活との境界が曖昧な状態で他の学生が抗議の言葉を投げかけたため、いじめ役の学生個人の人格に対する批判だと受け止めたためではないかと考えられる。

この事態に対応するため、筆者は授業後の学生達の感想のうち陰性感情を表出した部分を抜き出し、改めてこれを教材として学生をスモールグループに分けて各自が今回起った出来事とそこの感想について話し合い、このような嫌な思いをする学生を出さないために授業の中で教師はどのようなことができるかについて協議して発表することで、感情の共有と問題の解決を図った。これは集団内でおこったことはその集団内で解決するという、グループワークの基本的技法によるものである。学生の多くは、上記の事態の結果 RP を行った学生が感じた痛みに気付いておらず、筆者が全員を対象にした講義の中で陰性感情の共有を行うと、自らの行動の結果に驚く学生も見られた。又、このために生じた自らの陰性感情を攻撃性に転化して、場の管理者である筆者に向ける学生も見られた。

話し合いの後で発表された内容とまとめからは、筆者の授業方法や学生の態度、そこでのあり方について問題点や改善点が指摘され、学生たちの陰性感情がよりよい授業のあり方へと昇華したことが窺われた。また、提出されたいじめ役の学生のレポートから、学生が授業中に感じた気持ちをレポートに書くことで、自己の過去の体験と授業中に起った出来事を内面化、言語化して筆者に伝えることができ、自分なりに今回の体験を整理して心理的危機を乗り越えていることが窺えた。

17年度のカリキュラムの作成及び授業中に起こった出来事と提出されたレポートからの考察

平成16年度に起きた出来事から、学生の心理的安全性を増すために RP の実施方法を変更した。すなわち、RP の最中には筆者による介入を行わず学生による流れを尊重することとし、RP と終了後の感想の境界を明確にすることで学生の心理的枠組みを強化した。

また、これまでは2学部合同で授業を行っていたが、平成17年度は学部毎に授業を行うことになり少人数による授業展開となった。このためグループの凝集性が高まり、2年間の学生生活の中で既知の関係になった学生同士で、授業中に思ったことが自由に話せ自身の感情体験を表現しやすい雰囲気ができた。一方で多様性や新鮮味に欠けたため、グループダイナミクスが起りにくく社会的規範意識が希薄になる場面もみられた。

こうした自己の自然な感情表現が周囲の学生に受け止められるという、受容的な雰囲気の中で、家族の障害を RP の事例に用いたり、過去の自分自身のいじめや不登校、非行といった経験に関して率直に話すことができ、RP に学生が実体験を事例として取り上げることで活発な話し合いがなされ、相互理解が進む様子が観察された。提出されたレポートからは、学生たちが自らの体験をもとにそれぞれのテーマについて内省を深め、過去の感情体験を整理することで改めて現在の自己を肯定的にとらえていることが窺えた。

4 結果と考察

結果

以上、平成14年度から平成17年度までのシラバスとカリキュラムをもとに実際に行った授業を振り返り、前年度の反省点をふまえて次年度のカリキュラム作成していく過程を記述し、そこでのエピソードと提出されたレポートから4年間に行ったカリキュラムの変更に対して検討と考察を加えた。以下に効果測定として行った心理臨床家3名によるレポート評価と、評定の一致度を測定するために行ったケンドールの一致係数の結果を記す。

平成15年度におけるレポート評価に関して評定者3名の評定の一致度を測定するためにケンドールの一致係数を算出したところ $W=0.81$ と高い関連性が認められた。また、平成16年度は $W=0.75$ 、平成17年度は $W=0.97$ と高い関連性が認められた。これらの結果から評定者3名の4段階評価における一致度が高いため、レポート評価において学生が自らの体験に引きつけて学習内容をとらえ、感情体験を内面化して深めることで人格的成長に役立てているかどうかの4段階評価(0. 1. 2. 3)の評定結果は信頼できると考えられる。

平成15年度は全受講生27名中12名(44%)に自己の体験に基づいた記述が見られ、12名の評定平均値は1.56であった。平成16年度は全受講生44名中19名(43%)に自己の体験に基づいた記述が見られ、19名の評定平均値は0.95であった。また、平成17年度は全受講生28名中8名(29%)に自己の体験に基づいた記述が見られ、8名の評定平均値は1.9であった。

これらの結果から、平成15年度と16年度では「教育相談の研究」を履修した学生の40%以上が授業によって自己の体験を再確認し、心理的に成長していると考えられる。平成16年度の評定平均値の低下は、RPの最中に起った出来事に学生の多くが心理的に動揺し、その結果、心理的安全性を保つために自己の内面の表出を押さえたためではないかと考えられる。また平成17年度に関しては、自己の体験に基づいた記述は29%であった。これは授業中に多くが言語化され表出、発散されたため内省されず、レポートという記述による表現方法に反映されにくかったのではないかと考えられる。しかし記述されたレポートの評定からは、自己の体験がより深化して捉えられていることが窺え、それぞれの学生の内面に深く位置づけられていることが確認された。このことから、RP後のシェアリングによる自己の感情の解放とレポートを書いて提出するという行為が、学生にとって単に伝達された知識の集成のみならず、自己の体験や感情の内省、表出及び、自己の再体制化に役立っていると考えられる。

考察

本研究では、大学3年生の教職課程科目である「教育相談の研究」を効果的に学習するための

心理教育プログラムの開発を目的とした、カリキュラムの作成とその効果について考察した。教員養成のための教職課程における必修科目として、文部科学省や学校の求める教員の養成という本来の目的及び、筆者の意図したスクールカウンセラーの視点から見た望ましい教育相談担当者の育成という目的を達成するためのカリキュラムの作成である。4年間の研究の結果、3名の心理臨床家による評価結果からは授業によって自己の体験を内省して深めていく作業が行われ、学生の心理的成長が促進されていることが確かめられた。以下にカリキュラム作成に伴うその他の授業の工夫と効果に関する考察を行う。

1) 変化への動機付けを高めたグループワーク

学生はそれぞれが過去の様々な体験を抱えながら、普段はそれをほとんど意識化することなく日常生活を送っているのではないかと考えられる。そうした中で、授業という枠組みで教育現場における今日的課題である「いじめ」「不登校」「非行」「虐待」「発達障害」などのテーマを設定し、それぞれが興味のあるテーマを自由に選択できるようにしたことで、学生が自主的・主体的に自己の過去の体験と向き合うことのできる場を提供した。

テーマ毎に分かれたグループで自らの興味にそって、各自がテーマについて調査・研究しこれを発表する。さらに事例を用いて自分たちで RP を企画し実施することなど、様々な心理的枠組みや安全装置を施して、学生が主体的に過去の体験を振り返る機会を与えることは、今後社会人として自立した生活を営んでいくことを要求される学生にとって、大人への成長、発達の動機付けになるのではないだろうか。

2) 心理的成長を促進するロールプレイングの効果

筆者はこれまで学校において子育てに悩む保護者からの相談も受けてきたが、来談する保護者の中には学生時代に不登校やいじめ、虐待などを経験したことで、保護者自身が我が子に対する成長促進的な関わり方を学習する機会を持たなかったために、自信を持って育児に望むことができず、不安が高まった結果として我が子を追いつめてしまう例を見ることがある。親子関係は対人関係の基本であり、そこでは現実の自分自身をきちんと見つめる能力、理想や目標において自分自身を育てる能力、危機を乗り越える心の能力を育て、心理社会的能力を向上させることが必要とされる (太田:2005a)。

子どもから大人になるライフサイクルのどこかで、こうした過去の体験を整理し乗り越えることは、教員としてだけでなく将来子どもを育成する大人になるためにも、必要なのではないだろうか。その点今回行ったように、授業という守られた枠組みの中で自らが選択、企画して主体的に過去の再体験を行うことは、学生の安心感を高め RP の効果をよりいっそう高めるものと考えられる。RP が自己治癒経験に役立つことは既に知られているが、今回の研究においてはさらに成長促進的な効果が見られた。またより安全性を高めるために用い方に工夫が必要であることが示唆された。

3) 大学生のための予防・成長促進を目的とした包括的な心理教育プログラムの開発

鶴見 (2002) によれば大学の3年生は学生サイクルの中で「中間期」に分類される (表2)。

表2 学生期の各下位時期の心理的特徴 (中間期) (鶴田、2002より)

中 間 期	全体的特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生生活への初期の適応が終わり、将来へ向けた選択がしだいに近づいてくる時期 ・ 一般に生活上の変化が少なく、時間をかけて自分を見つめることができる時期であり、学生生活を展開して自分らしさを探究する時期 ・ 逆に、スランプや無気力、無関心に陥りやすい時期 ・ 大学入学直後の表面的な適応を一時的に壊して真の適応へと至る期間であり、あいまいさの中で内面を見つめる体験をする時期 ・ 対人関係をめぐる問題が生じやすい時期
	学 業	相談：意欲減退、留年など 課題：中だるみへの対処、専攻の決定、関心的を絞ること
	進 路	相談：進路変更希望、将来の進路への不安 課題：研究室の選択、将来の進路選択への準備
	学生生活	相談：無気力、スランプなど 課題：自分らしい学生生活の展開
	対人関係	相談：同年代との横の対人関係、恋愛、孤立、リーダーシップ 課題：対人関係の深まりと広がり、集団の中での対人関係
	親子関係	相談：家族からの分離 課題：変化が少ない時期、家族を客観視すること
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 来るべき船出へ向けての準備期間である「空白の時代」(立花、1988) というイメージ 	

この時期には学生生活を展開して自分らしさを探求することが課題となる。エリクソンの言う、自我同一性 (ego identity) の達成の時期である (1959)。自分らしさやアイデンティティの探求が行われ、将来の目標に向かって前進していく時期でもある。

このような移行期としての青年期の特徴、青年の発達を支援する教育的なかかわり方などについて理解を深め、青年の発達を支援するための心理教育プログラムとして、筆者は以前から大学において2学年対象の「心理学」や「教育相談の研究」の授業の中で、継続して心理教育的アプローチを行ってきた (太田：2005b)。これは筆者が臨床心理学を専門とすることから授業担当者として意味が感じられ、かつ充実感のあるものにするためであり、また大学生を教えるようになって、思春期後期にある青年に対する成長促進的な働きかけの必要性を痛感したためでもある。小学校や中学校、高等学校時代にいじめや不登校を経験した学生が、自分自身の経験を再体験することで、過去を振り返って気持ちの整理を行うことは、大人になろうとする20歳の今だからこそ可能であり必要なことであろう。心身の成長にともなって当時のつらさをしっかりと受け止め、改めて自己の内で体制化し、整理し直して初めて乗り越えることができるのである。このためには継続的に学生のレディネスを捉えて心理的成長を遂げることのできる環境を提供するためのプログラムの作成と施行が必要である。

5 終わりに

本研究では教職課程科目を効果的に学習するための大学教育を基盤とした心理教育プログラムの開発について検討した。カリキュラムの検討を基にプログラムを修正し、授業の効果に関する評価研究を行なった。青少年の心理的成長は、短期的にも長期的にも青年の健全な発達に影響を与える重大な問題である。文部科学省における中学生の問題行動対策としては、スクールカウンセラーの導入が実施され、成果と重要性が報告されている。しかし、学校における生徒の問題行動は多様化し、依然として憂慮すべき状態にあると思われる。このような実情をふまえると、中学生の成長した姿としての大学生の現状において、教員養成課程のみならず“全ての学生を対象にし成長促進的関わりを目的とした心理教育プログラム”の導入が必要であると考えられる。

参考文献

- Carl Rogers 1961 A Therapist's View of the Good Life; The Fully Functioning Person. The Humanist, Val.17, 1957. Expanded in On Becoming a Person. Boston; Houghton Mifflin, 1961, 184-196. 伊東博 村山正治監訳 2001 ロジャーズ選集(下) p190-204. 十分に機能する人間——よき生き方についての私見 誠信書房
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. Psychological issues, No. 1. New York : International Universities Press. 小此木啓吾編訳 1973 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル—— 誠信書房
- 亀口憲治・堀田香織 1998 学校と家族の連携を促進するスクール・カウンセリングの開発 I ——理論的枠組みを中心に—— 東京大学大学院教育研究科紀要 第38巻
- 亀口憲治・堀田香織・佐伯直子・高橋亜希子 1999 学校と家族の連携を促進するスクール・カウンセリングの開発 II ——技法の選択とその実践—— 東京大学大学院教育研究科紀要 第39巻
- 文部科学省初等中等局中学校課 2005 生徒指導上の諸問題の現状(概要)
- 文部科学省初等中等教育局 教職員課教育職員養成審議会 1997 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(第一次答申)
- 村山正治 2003 コミュニティアプローチ特論 放送大学教育振興会
- 中田行重 2003a キャンパスにおけるコミュニティアプローチの展開 村山正治編 コミュニティ・アプローチ特論 放送大学教育振興会 pp89-100
- 太田列子 2002 教育相談の研究 梅光学院文学部講義内容一覧(シラバス) pp205
- 太田列子 a 2005 母子併行面接における母親面接——子どもの問題を主訴として来談した母親に対する指示的アプローチ—— 心理臨床研究 東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要 第5号 pp45-52
- 太田列子 b 2005 大学生に対する心理教育的アプローチ——キャンパス・コミュニティ・アプローチの視点から—— 梅光学院大学論集 第38号 pp1-10
- 鶴田和美 2002 Vol.2 No.6 大学生とアイデンティティ形成の問題 臨床心理学 金剛出版 pp725-730